

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00184

研究課題名(和文)16世紀フランス・ルネサンスのフォンテーヌブロー派によるタピスリー研究

研究課題名(英文)Study of the Fontainebleau School and French Renaissance tapestries

研究代表者

小林 亜起子(KOBAYASHI, Akiko)

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：00618275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国王フランソワ1世(在位1515-1547)が、フォンテーヌブロー宮殿に創設した工房で織られたフォンテーヌブロー派の下絵にもとづくタピスリーに関する総合研究である。一連の調査を経て、この工房の全体像を把握すると同時に、フォンテーヌブロー派を代表する画家ロッソとプリマティッチョにもとづくタピスリー及び関連素描について、国王のパトロネージュの文脈を踏まえた作品解釈を試み、新たな知見を有する論文を公刊した。またこれらの研究成果は、これまで筆者が実施してきた18世紀王立タピスリー製作所の研究にはじまる、王権の庇護下に発展を遂げた近世フランスのタピスリー研究の出発点に位置づけられるものとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス・ルネサンスの美術及びフォンテーヌブロー派に関する研究においては、絵画研究が主流をなしており、タピスリーに関連した画家の制作活動は軽視されてきた。これに対し本研究では、フランソワ1世とアンリ2世(在位1547-1559)の時代の宮廷画家ロッソとプリマティッチョに代表されるフォンテーヌブロー派のタピスリーについて調査分析が行われた。そこで得られた新たな知見は、16世紀フランス・ルネサンス美術の研究、フォンテーヌブロー派の研究におけるタピスリー芸術の重要性を再評価するものとなった。その国際的な学術的意義を考慮して、研究成果は邦語及び仏語論文で発表された。

研究成果の概要(英文)：This study concerns a sixteenth-century French Renaissance tapestry after the Fontainebleau School, made in the workshop founded by King Francois I on the grounds of the Fontainebleau Palace. While carrying out a series of research studies, we have attempted to interpret the tapestries and related drawings by Rosso and Primaticcio, two of the most important Fontainebleau artists, in the context of the king's patronage, and have published papers with new insights. These results mark the beginning of a series of studies on early modern French tapestries that developed under the patronage of the monarchy, starting with our research on the Royal Tapestry Manufacture of the 18th century.

研究分野：美術史

キーワード：タピスリー フォンテーヌブロー派 フランソワ1世 アンリ2世 カトリーヌ・ド・メディシス ロッソ プリマティッチョ 王権表象

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者はこれまで、18世紀フランスの王立タピスリー製作所であるボーヴェ及びゴブランで織られたタピスリーについて研究を続けてきた。本研究の着想は、こうした王立タピスリー製作所のタピスリーを研究していく過程で生じた。17世紀にルイ14世によって設立されたボーヴェやゴブランなどの王立タピスリー製作所の設立の発想の萌芽は、逆れば、国家の中央集権化の礎を築いた国王フランソワ1世がフォンテーヌブロー宮殿内に設立した工房の創設にある。そこで筆者は、フランソワ1世、次いでアンリ2世の庇護下で制作されるタピスリーについて研究することによって、王権の保護下で発展をみる「近世フランスのタピスリー芸術」の特質を総合的に見直すことができるのではないかと考えた。

(2) フランス・ルネサンスのタピスリー研究は、国内においては初めての試みであり、これまでまとまった研究はなされていない。一方、海外においては、ルネサンスのタピスリーに関する大規模な展覧会(2002)がメトロポリタン美術館にて開催され、学術的な注目を集めた。しかし、フランスのタピスリーはわずか2点しか出品されず、十分な関心を集めたとはいいがたい。また、この時代のタピスリーについては、個別的な論考があるものの、いまだ包括的な研究はなされていない。近世フランスのタピスリー研究書を著したフナイユ(1903)は、16世紀にフォンテーヌブロー宮殿に作られた工房と作品について取り上げてはいるものの、その主たる関心は17世紀以降のタピスリーである。また、フランス・ルネサンス美術研究(ロウ1929、ゼルネール1997)やフォンテーヌブロー派の作家研究(シャステル1972)のなかで、ごく一部の作品のほかは断片的に言及される程度である。本研究は、国内外におけるタピスリー研究及びフランス・ルネサンス美術研究上のこうした欠落を補完し、王権のパトロネージという視点から、近世フランスのタピスリーを捉え直す試みとして着手された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、王権の庇護と密接に結びつきながら発展をみる近世フランスのタピスリーの歴史的展開を明らかにするために、その出発点となるフォンテーヌブロー派の原画にもとづくフランス・ルネサンスのタピスリーの特質について、一次史料調査と作品研究によって明らかにすることにある。そこで、16世紀ヴァロワ朝の国王フランソワ1世によってフォンテーヌブロー宮殿に設立された工房で織られたタピスリーについて解明することを目指した。

(2) 先行研究において、確実にフォンテーヌブローの工房で織られたと見なされるタピスリーとしては、フランソワ1世及びアンリ2世の時代に重用された二人のイタリア出身の画家ロッソ・フィオレンティーノとフランチェスコ・プリマティッチョの下絵にもとづくタピスリーが挙げられる。彼らは、フォンテーヌブロー宮殿の装飾を指揮し、いわゆる「フォンテーヌブロー派」と称される芸術家たちの形成の上で中核をになった。したがって本研究では、この二人の画家が、王権の保護のもとで構想したタピスリー及び関連素描に焦点を当て、その造形的、図像的特質を明示することを通じて、フランス・ルネサンスのタピスリー芸術の本質を浮彫にすることを試みた。

3. 研究の方法

(1) フォンテーヌブロー宮殿内にタピスリーの工房が創設されたのは1537年頃である。工房は王立建築物局総監の指揮下に運営され、16世紀の第三四半期までのあいだに、ロッソやプリマティッチョをはじめとするフォンテーヌブロー派の画家の下絵にもとづく作品が織られた。研究は以下の2つの方法を念頭に遂行された。

(2) 第一に、文献資料の収集・調査及び精査。調査では、フランソワ1世が設立した工房の運営状況、それを統括した王立建築物局総監の役割および、下絵を提供した画家たちとの共同関係について検討した。そこで工房の組織と経営体制について精査するとともに、フォンテーヌブローの工房との接点を持つ織師が働いていたパリに点在する工房の状況についても調査した。

(3) 第二に、作品調査と分析。フォンテーヌブロー宮殿の工房で織り出された3つのタピスリー連作の特質を、実見調査、図像学的分析、および関連資料の精査によって明らかにしていった。タピスリーだけでなく、現存する下絵や関連素描を網羅的に検討した。そこで織られたタピスリーは、フォンテーヌブロー宮殿のフレスコ画による回廊装飾を多かれ少なかれ手本としていることから、壁画装飾の分析も必要となった。これらの画家の手になるタピスリー関連素描(それらにもとづいて織られたタピスリー及び素描の主たる所蔵先はパリのルーヴル美術館、ウィーンの美術史美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館)の詳細な分析と、資料調査にもとづく歴史的文脈の考察をあわせることで、フォンテーヌブロー派を代表する第一級の宮廷画家のタピスリー芸術への貢献がいかなるものであったかを、美術的に明らかにしていった。

4. 研究成果

(1) 初年度はまずは本研究のための基礎作業を実施し、フランソワ 1 世のタピスリー工房の実態に関する資料・画像収集とデータの整理とともに、同工房で織られたフォンテーヌブロー派の下絵にもとづくタピスリーの基本的な情報をとりまとめた。この作業によって、フランソワ 1 世が設立した工房の運営状況、それを統括した王立建築物局総監の役割および、下絵を提供した画家たちとの共同関係解明するとともに、工房の組織と経営体制について精査することができた。またこれらの調査研究を進める過程では、パリの装飾芸術美術館およびルーヴル美術館での現地調査を実施した。その成果の一部は、論文「ロツとプリマティッチョによる「フランソワ 1 世のギャラリー」にもとづくタピスリー」としてまとめられ、公刊された。

(2) 2019 年度は、前年度に遂行された基礎研究、すなわち、フォンテーヌブローの工房についての資料収集とフォンテーヌブロー派のタピスリーに関する情報収集とデータの整理を続けた。それによって、前述の刊行からほぼ 1 世紀を経たフナイユ (1903) によるタピスリーの基礎研究の内容に改訂・補足を加えることができた。この作業と並行して、昨年度の調査研究の課題として残されたテーマ、すなわち、ロツとタピスリー芸術の関係について、さらに踏み込んで調査を行った。一連の成果の一部は、論文「ロツ・フィオレンティーノとタピスリー《ラウラの死をめぐるペトルルカの幻影》について」としてまとめられた。ロツの手になるタピスリーは、上述のタピスリー連作「フランソワ 1 世のギャラリー」のみしか知られていない。これに対して同論文では、ロツがこの連作を手がける以前に、フランソワ 1 世の息子アンリ 2 世とカトリーヌ・ド・メディシスの結婚を機に、国王フランソワに強くアピールするタピスリーの制作を試みていた、という新知見を提示した。本論文で示された王権表象をめぐる図像解釈は、次年度にとり行う調査研究を進める上で、重要な視点を提示するものとなった。

(3) 最終年度は、ロツの死後、第一次フォンテーヌブロー派を牽引し、国王アンリ 2 世の庇護下にフォンテーヌブロー宮殿の装飾の指揮をとったプリマティッチョの下絵にもとづくタピスリーに焦点を絞り、調査・研究を遂行した。確実にプリマティッチョの手に帰されるタピスリーとしては、すでに初年度に論じたロツとともにプリマティッチョが手がけたフレスコ画「フランソワ 1 世のギャラリー」にもとづく連作のほか、連作「アラベスクの神々」が挙げられる。本年度の研究成果は、この「アラベスクの神々」を考察対象とする仏語論文《Primitice et la tapisserie : Cybele dans la tenture des Dieux Arabesques》として発表された。そこでは、これまで等閑視されてきた本作に織り込まれた神話図像の考察を通じて、この作品がアンリ 2 世と王妃カトリーヌ・ド・メディシスの統治下におけるヴァロワ朝の黄金時代を象徴するタピスリーとして構想されたものであることを明らかにした。さらにこのタピスリーが、プリマティッチョの代表作であるフォンテーヌブロー宮殿の「ユリシーズのギャラリー」と密接に結びつけられることを示し、画家の野心作として位置づけられることを明示した。

(4) 研究期間を通じて、フォンテーヌブロー派の中核的存在であったロツとプリマティッチョ、彼らの画業におけるタピスリー芸術との関わりを掘り下げて論じ、新たな作品解釈、新知見を提示することができた。一連の研究成果は、これまで看過されてきた、これらの画家とタピスリー芸術との関わりを再評価する試みとして研究史に寄与するものであるとともに、近世フランスにおける王権とタピスリー芸術との関係を考える上でも、重要な基礎研究として寄与するものである。これらの成果は、筆者がすでに取り組んできた 18 世紀を中心とする王立ゴブラン製作所、王立ボーヴェ製作所の研究とあわせて、近世フランスのタピスリーに関する総合研究を行う上での重要な出発点として位置付けられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 小林亜起子 | 4. 巻 42 |
| 2. 論文標題 「ロッソ・フィオレンティーノとタピスリー《ラウラの死をめぐるペトラルカの幻影》について」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『地中海学研究』 | 6. 最初と最後の頁 31-55 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 小林亜起子 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 ロッソとプリマティッチョによる「フランソワ1世のギャラリー」にもとづくタピスリー | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History | 6. 最初と最後の頁 35-42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Akiko Kobayashi | 4. 巻 56 |
| 2. 論文標題 Primitice et la tapisserie : Cybele dans la tenture des Dieux Arabesques | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Bulletin of the Faculty of Fine Arts, Tokyo University of the Arts | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 小林亜起子 |
| 2. 発表標題 「近世フランスのタピスリー芸術について」 |
| 3. 学会等名 第19回一橋大学「芸術と社会」研究会例会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 矢代幸雄、バーナード・ベレンソン著/山梨絵美子、越川倫明編訳/ジョナサン・K・ネルソン(特別寄稿)/中村明子、小林亜起子、深田麻里亜、下東佳那訳 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 玉川大学出版部 | 5. 総ページ数 408頁 |
| 3. 書名 『美術の国の自由市民 矢代幸雄とバーナード・ベレンソンの往復書簡』 | |

| | |
|---|------------------|
| 1. 著者名 近世美術研究会 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 中央公論美術出版 | 5. 総ページ数 420頁 |
| 3. 書名 『イメージ制作の場と環境 西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論』 | |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 木村三郎監修、望月典子、栗田秀法、新畑泰秀、安室可奈子、小林亜起子、中島智章 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 中央公論美術出版 | 5. 総ページ数 264頁 |
| 3. 書名 『新古典主義美術の系譜』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|